

Book Review



内科医から伝えたい 歯科医院に知ってほしい 糖尿病のこと

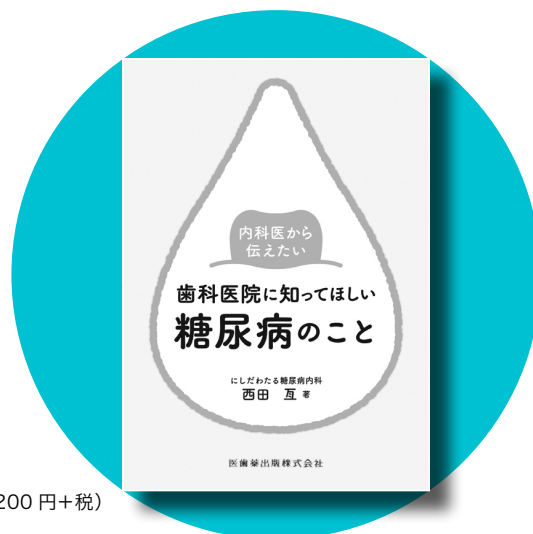
西田 互 著



Reviewer

米澤大地 Daichi Yonezawa
(兵庫県・米澤歯科醫院)

B5 判, 90 頁
定価 (本体 3,200 円+税)
医歯薬出版刊



「糖尿病は一部の有病者」。一般人だけでなく歯科医にとってもそのイメージしかないかもしれないが、現実異なる。歯周病が糖尿病の合併症であることが認められはじめ、さらに歯周病によって糖尿病が増悪することもわかってきた。

当歯科医院でも、複数名糖尿病を患い生死の危険があった患者もいた。しかし、近隣の内科のコントロールではよくならない。そこで、敗血症のリスクを負いつつ、私の判断で抗生剤を併用して拔牙や歯周治療を行った。その結果、劇的に血糖値が下がり症状が改善した。この事例は特殊ではない。本書で解説されている、「隠れ糖尿病」も多く存在する。

2型糖尿病は単なる『肥満』ではない。巨大化した肥満細胞の慢性炎症で、それが膵臓に過労を強要し、疲弊によりインスリンの分泌機能を破壊する。人類は飢餓との戦いの歴史で、飽食との戦いはここ数十年のこと。したがって、血糖値を上げるための戦闘要員はアドレナリン、グルコースなど複

数配備しているが、血糖値を下げる戦闘要員は膵臓のランゲルハンス島から出動するインスリンしかない。本書のそのような解説がユニークで面白い。

そして、肥満細胞の慢性炎症となれば歯周病もまた慢性炎症である。われわれ歯科医がその炎症をコントロールできないことで、全身に多大な悪影響を及ぼしている。まず、歯科医はこの事実を知る必要がある。

インプラント治療の普及は欠損歯列に恩恵をもたらした。しかし、その影も落としている。インプラント周囲炎というさらにタチの悪い新たな疾患の誕生である。周囲炎は歯周炎ではない。世界中の歯周病専門医がその予防法とともに救済法を整理しつつあるが、顎骨炎を起こしながらでも天然歯ではなく人工物の救済に邁進するのは議論の余地があるかと思うが、その慢性炎症も膵臓への攻撃となり、疲弊がインスリンの敗北につながる。

そのコントロールの一手法としても本書はヒントを与えてくれた。HbA1cとともに慢性炎症をモニタリングする

高感度 CRP である。医科検診では『健康』と太鼓判を押される数値でも、心筋梗塞発症のリスクは2倍に上がるという。口腔の慢性炎症を看過することはできない。

われわれ歯科医は歯周炎やインプラント周囲炎の治療成果を評価するため、血液のモニタリングを通して患者の感染管理ができる可能性も見えてきた。

本書は、今後歯科医として必要とされる知識を取っ付きやすく、わかりやすい愉快的な論調で新たな臨床的視点とともに解説されている。ベテランの諸先生方から、若い歯科医師まで、全員に一読していただきたい。なかでも歯科医は全身の健康状態を把握できる職種に変わる可能性を強調したい。

また、このような知識の患者への啓蒙が進むと、近所の患者からも歯科への関心が広がり、歯科医院への来院にも結びつき、ひいては地域の医療費削減の可能性まで備えている。本書はそれだけのパワーを持っている。